

絆

きずな
KIZUNA

小・中学生のときの「平和学習」。皆さんは覚えていますか。

広島と長崎に原子爆弾が落とされるなど、多くの人々が犠牲になった太平洋戦争。教科書などのさまざまな資料で「出来事」を学ぶことはできたとしても、やはり現代を生きる私たちのほとんどは戦争を知りません。

福津市津屋崎に住む深田政武さん、麻紀さん親子の先祖が残した手紙、写真、そして記録。大切に保管されてきた数々の資料が、戦争の恐ろしさ、悲惨さを教えてくれます。

戦死する間際まで「母上は元気ですか」と、戦地から父に手紙を送り続けた息子。息子の無事を祈り、戦死の連絡があるまで「まさか不吉なことはあるまい」と、約10カ月間、手紙を送り続けた父。

戦地で次々と倒れていく仲間たち。倒れた仲間を探しても、見分けが付かないほどの数多の死体。直接的な攻撃だけでなく、飢えや病に苦しんだこと。どれほど恐ろしいことが起き、つらい日々を乗り越えてきたのか、また、戦友を忘れまいと「記憶」と「記録」に残した人がいます。

空襲はなかったものの津屋崎にもあった戦争の脅威。当時の津屋崎での暮らしを、上田弘美さんと立石伸子さんに尋ね、身近にあった「記憶」と「記録」から、戦争について考えてみましょう。

CHAPTER 1

家族の絆

およそ80年前、太平洋戦争で日本とアメリカが激戦を繰り広げたガダルカナル島。津屋崎から出征し、ここで戦死した深田文次さん。わずか23歳で戦死し、日本に戻ってくることはありませんでした。

文次さんが日本にいる父、政次さんへ戦地から送り続けた手紙があります。

父から子へ。子から父へ。戦地と津屋崎でおよそ70通もの手紙のやり取りがありました。



▲文次さんが戦地で戦友と撮影した写真。中には笑顔の写真もあり、元気な様子うかがえます

▲戦地から届いた手紙

津屋崎町で桶屋を営んでいた深田政次さんの次男・文次さんは、昭和14年12月、20歳で入隊し、昭和15年2月に戦地行きの命令を受けます。父・政次さんに宛てた手紙には「いよいよ戦地行きの命令が本日達せられました。23日の午前8時までに来てください。出発前に約15分が20分くらい面会が許されます。支那○○方面です」と書かれて

入隊と出征

昭和12年に開戦した日中戦争に始まり、東南アジアへと侵攻した大日本帝国軍。昭和16年12月8日にハワイの真珠湾を攻撃したことで、太平洋戦争が勃発しました。昭和20年に広島と長崎に原子爆弾が落とされ、無条件降伏するまでにおよそ310万人もの犠牲者が出たといわれています。

太平洋戦争勃発

行先先の細かな位置は軍の防諜上伝えられず、わずかな時間で家族に別れを告げなければならぬ苦しさは計り知れません。

徐々に激しくなる戦闘 途絶えた手紙

その後、南支(中国南部)での訓練に励む文次さんは「益々元気に軍務に服しています」という言葉通り、しばらくは襲撃に遭うこともなく明るく充実した日々を送っていました。

「田んぼのあぜを前進中、射撃を受け、田んぼに伏せて応戦したのですが、弾は自分の身辺にも音を立てて泥田に落ち、あるいは水煙をあげて落ちてくるのです。自分もこれが最後のご奉公だと決死の覚悟を固めました」。南支での作戦を終え軍に戻った後、生々しい戦いの模様を手紙に記しながら「豊



◀入隊前の文次さん

ることを示唆する言葉の数々。昭和17年10月に届いた「母上は元気ですか(御守りは受け取りました)」と、母親を気遣う手紙を最後に、文次さんからの手紙は途絶えました。



▲戦地から送られてきた
絵はがき

無事の便りを待つ日々

文次さんは昭和15年の出征以降、父・政次さんへの状況報告、また妹や弟に宛てた励ましの手紙を書き続けました。息子からの便りを待ちわび、手紙が到着した数日後には返信をしていった政次さん。戦地に送り出した息子の無事を確認できる唯一の手段だった手紙。しばらく間が空くと「久しく便りがないから心配していた」と、息子の身を案じ、気が気でない日々を送っていました。



▲家業の桶屋で使っていた便箋に書き記した政次さんから文次さんへの手紙。複写式になっていて、送った内容がきれいに残っています

大雨で町内の橋が落ちたり、ぜいたく品などの製造販売が制限されるなどの国内情勢を伝えながら「随分ヒドイ訓練が行われる事でしょうが、身骨の続くかぎり一死奉公、至誠通天の決心をもってますます健康を保持し、もって優秀なる成績をあげ、最後の勝利を得て初志を貫徹し、進んで上級の学校に登校せられん事を切に切に希望するしだいであります」と、文次さんを励ます言葉を送る政次さん。

さらに、文次さんを元気づけようと「つるし柿、お菓子、するめ、ふんどし」などを入れ

途絶えた連絡に募る不安

慰問袋を送ります。「久しぶりにつるし柿を食って、内地のあの晩秋のころを思い出しました」と、故郷を思い出す文次さんからの返信の文面には、寂しさがにじみ出ていました。

戦闘の最中、また作戦の途中であることから、政次さんからの便りがあっても文次さんは手紙を書けず、その数は徐々に減っていきます。そして昭和17年10月を最後に、連絡は途絶えてしまいました。

「その後久しく音信がありませんがお変わりありませんか」「昨年9月27日到着の郵便を見たままで何の音信もありませんので、今頃どこで奮闘せられておるか、まさか不吉な事はあるまい」。あまりにも遅い文次さんからの返信に募る不安。無事を願いながら、便りを待ちました。

文次の戦死 悲しみに暮れる深田家

昭和18年8月「ちょっと仕事して夕方6時半ごろ、理髪に行く。途中、豊子(文次の妹)

が泣いて手紙を持ちて帰るのに出会うたところ、文次の戦死の公報であった。かねてより覚悟の事とは言え眩みがおつたが落ち着いて理髪を終わり、家族に知らせた。17年10月25日の戦死が約10カ月後の今日、来るとは思わなかった。政次さんの日誌に記された文次さんの戦死。「陸軍軍曹深田文次殿。昭和17年10月25日、南

▼政次さんが毎日記録していた日誌。開戦の日や文次さんの戦死が記されています



太平洋戦線ニ於テ名誉の戦死セラル。謹ミテ敬弔ノ誠ヲ捧グ」と記された戦死公報は、深田家を悲しみの底に突き落しました。最後の便りまで、一回も欠かすことなく母の安否を尋ねた文次さん。わずか23歳で悲惨な最期を遂げ、津屋崎に戻ってくることはできませんでした。

僕もいよいよ表記部隊に晴れの入隊をなし、希望に充ち満ちてます。元氣旺盛でいます。何とぞご安心ください。父・母上の写真がもしあつたらお送りください。朝夕の礼拝にするはずで。

慰問袋も手紙の着く前に受け取っていました。菓子、するめなど、みんな立派にしていて少しも変味している物はありません。糖分欠乏の我々には何よりの楽しみです。久しぶりにつるし柿を食って、内地のあの晩秋のころを思い出しました。

我々も〇〇まで来て色々珍しい事や変わった事に遭遇して色々詳しく当方の状況も知らせたいが、防諜上書かれぬは残念ですが、皆様の想像に任せます。とにかく元氣に奮闘していることは確かです。承知の様に皇軍はいまや至るところに堂々進軍し、我が日章旗は破竹の勢いで進んでいます。

第2回のお正月は第一線で迎えました。突如として御下賜品の煙草が到着致しました。ありがたき極みである。数知れぬ一兵に至るまで、もれなく御下賜くださるとは何たる御慈愛なるか。大切に御神棚に奉上致しております。

新聞などで見るに戦死はそれほど感じませんが戦病死とあるのを見ると實際涙が出る。同じく国家に捧げし身、しかも戦地に行きながら病のために倒れ功もならずして果たし身はいかほど残念でありますでしょうか。家族の人々の顔を見るのも気の毒です。何とぞ患わぬようにきをつけてください。

本日、慰問袋を一個発送致しました。中には「つるし柿、お菓子、するめ、ふんどし」そのほか。先日写真を撮ったができが大変悪いのでまたやり直しだ。そのうちできしだい送る。では安心して健康に。

南の方でもだいぶあちこちに上陸しましたが、気候風土などは大差なく、暑いのは暑い慣れると大したこともなく、かえって内地より住みよい位です。珍しい物とて別にありませんが、椰子の実、パイヤなどは至るところにあります。行軍中には非常にのどが渇くので、休憩時には必ず落としてあの大きな奴をかかえて飲むとまた非常に元氣がきます。

両親の写真も受け取りました。父母の健在な姿を見ていままさらながら懐かしさと非常な心強さを感じました。

戦地の方では物資は相当にありません。飲食物等はどうな有様ですか。酒など不自由でしょう。内地では酒が不足とか、米だとか言っているけれどもまだまだ変わらぬものですよ。決して心配はいらぬ。長期に堪えうるだけの覚悟を練っておるのに過ぎない。

子から父へ

次に戦闘の様子をちよつと知らせおきましよう。行動を開始した我が健脚〇〇部隊は、鉄をも溶かす炎熱下に日に10里か15里もの急行軍にて、あるは泥田の水をすすり、あるは生芋、果物「きゅうり」「なすび」までもかじりながら急追撃をしました。敵はチェッコ機銃をもって、むちゃくちゃに射ちまくって来ました。ちよつど我々は田んぼの畦を前進中、不意に射撃を受け、何の遮蔽物もないその田んぼに伏せて応戦したのですが、自分の身辺にも「ぶすぶす」と不気味な音を立てて、泥田に落ちあるいは水煙をあげて激しく付近に落ちて来るのです。自分もこれが最後の御奉公だと決死の覚悟を固めました。

開戦以来、数次の戦闘で親しい戦友果ては信頼の上官まで失いましたが、幸か不幸か小生等まだ元氣一杯で御奉公に邁進しています。目下、椰子の樹茂る常夏の国〇〇にいます。昭人、昭子もさぞ大きくなって元氣に通学していることでしょう。母上は元氣ですか（御守りは受け取りました）。よろしく。取り急ぎ一報まで。南方戦線より。

父から子へ

待望の初陣戦闘に参加されたるは大いに満足致しました想像以上の困苦に打ち勝ち無事帰還されたことは無上の喜びであります。

昨年八月、森田軍曹ともに帰郷されていた谷口准尉は戦死された。痛惜に堪えません。幸い本町はこの間までの発表には一人の戦死者も出さず、しかし後報いかんと神経を過敏に電報配達に目をつけておる次第です。戦死はもとより覚悟だが、長軀の戦闘には参加して赫々たる勲功を立てながら最後に病死するような不幸極まりなき勇士に列しては誠に気の毒に堪えぬ。

君幸いに健康に健康に暇ができたらお便りを。

その後久しく便りを致しませんですみませぬ。二十七日到着のお便りを見ましたまま今日まで何の音信もありませんので、今頃どこで奮闘せられておるか。まさか不吉な事はあるまい。

戦時中を生きた人々

戦時中、そして現在も津屋崎で暮らし続けている人たちがいます。空襲はなかったものの、当時津屋崎に暮らしていた人は何を思い、どのような暮らしをしていたのか。終戦当時小学生だった上田弘美さん、立石伸子さんに話を聞きました。

満州で過ごした幼少期
母の涙と太平洋戦争の開戦

「4歳から小学1年生になるまで満州（現在の中国北東部）で暮らしていた」と言う立石伸子さん。昭和15年に父親の仕事のため津屋崎を離れ、家族で満州に渡りました。日中戦争の最中でしたが「満州での生活は楽しいことばかりで夢のようだった。父の休日には、弁当を持って叔母の家族とピクニック。中華街に食事に行くこともあった」と、食糧難にあえぐ日本とは打って変わって、優雅な生活を送っていました。

そんなある日、立石さんは母親が台所で涙を流しているのを見ました。当時5歳だった立石さんは、初めて見た母の涙に大きなショックを受けたといいます。近寄ることができず、泣きたい気持ちを抑えて立ち尽くしていたことをはっきりと覚えていました。ずっと後になってわかったのは、その日は昭和16年12月8日、太平洋戦争の開戦の日だったこと。それから80年の月日が流れても「真珠湾のニュースを聞く度に母の涙を思い出す」と言います。

日本に帰国
貧しい生活と軍事教育

昭和18年、小学校入学直後、日本



津屋崎が戦場にならなくて良かった

家業は継続できず企業合同
何とか食をつなぐ毎日

1854年に創業した上田製菓は、数年前惜しまれながら閉店しました。その上田製菓の6代目店主だった上田弘美さんも小学生のときに戦争を体験した一人です。

戦争が始まると、砂糖など、お菓子の材料がなくなり、家業のお菓子屋は経営できなくなってしまいました。上田製菓だけでなく、一軒一軒では経営できなくなった宗像周辺のお菓子屋は企業合同し、塩田で働かなければなりませんでした。

Ueda Hiromi 上田弘美

そうして、何とか食をつなぐようにしていたものの、食料は配給頼み。自給自足でイモやカボチャができたから毎日毎日イモやカボチャばかり食べる生活。「あの頃、一生分のイモとカボチャを食べた。食うもの食わずにみんなよく頑張っていた」。生活は貧しく、食べるものはろくになかったけれど、何とか生きようとしていました。

警戒警報におびえる日々
間に合わないときは畑に伏せろ

靴などなく、下駄を履くか裸足で小学校に行っていたという上田さん。当時は田畑ばかりで住宅が少なく、真っ直ぐ小学校まで行くことができたといいます。

「こんな田舎に爆弾は落とすまい」と思いながらも、空襲警報のサイレンが鳴るたびに防空壕に逃げ込みます。防空壕は各自宅や町内に作っていたため、自宅に帰らなければなりませんでした。「山手に住んでいる人は帰るのに時間がかかってしまうため、先生から『間に合わないときは畑に飛び込んで伏せておきなさい』と言われていた」。

また、就寝時にもいざというときの準備が必要で、上田さんは枕元に

物やタンスは全て食料に変わった」。タンスの跡の白い畳が哀しかったといっています。

昭和19年頃、小学4年生以上は校庭で竹槍訓練をしていました。当時小学3年生だった立石さんは「早く4年生になって訓練を受けたい」。健気にも、そう考えていたそうです。「鬼畜米英」「ほしがりません勝つまでは」の教育を受け、立派な軍国少女を軍国少女にしてしまう教育はおそろしい。こんなことは未来永劫あってはならない」と唇をかみます。

恐ろしかった空襲警報
終戦に心から安堵

昭和20年になると本土空襲も頻繁になり、学校にいても警戒警報のサイレンで集団下校し、防空壕へ。そんな毎日が繰り返されました。

「ある夜、ものすごい爆音で飛行機が津屋崎の上を飛んだ。爆弾が落とされたと思い、防空壕の中で全員身を寄せ合って震えた。しばらく静寂の時間が過ぎ、外に出ると、対岸の福岡市方面が真っ赤に燃え、不気味な明るさで空が染められている。まるで火のカーテンのようだった」。それが6月19日の福岡大空襲でした。

必ずカバンと防空頭巾を置いて、すぐに防空壕に逃げ込むことができるようにしていました。

始まった分散教育
身近にあった戦争の影

戦争末期には、警戒警報、空襲警報が頻繁になり、学校に行くこともできなくなりました。近所の寺や集会所、旅館などに子どもたちが集まり、始まった分散教育。当然、毎日



先生が来るわけがなく、藤棚の下の砂場で軍艦や飛行機を作ったり、海で遊んだりしていました。

小学校の講堂には兵隊が駐留し、近所には訓練所もありました。自宅には将校が下宿し、常に上田さんの身近にあった戦争の影。「津屋崎が戦場にならなくて良かった。世界で悲惨な戦争が起きていた中、家族や町が無事だったことが唯一の救いだった」と話してくれました。

た。博多で酒の卸問屋をしていた親戚の大きな店も、立派な屋敷も廃墟となっていました。

そして8月15日に終戦。雑音混じりにラジオから昭和天皇の肉声流れ、大人たちは「戦争は負けた」と言っとうなだれていました。「これで防空壕に入らなくていい」。それが何よりうれしかったといいます。



「今から10年後、戦時中の悲しさや苦しさを記憶している人はもつと少数になっていると思う。私自身、生きているかどうか分からない。そうだとすると、その時代には地球上で争いごとは一切なく、世界中の子どもたちが飢えもなく夢と希望を持って、笑顔で生き生きしている世の中であってほしい」。

80年も前の記憶を話してくれた立石さんは、これから先の未来を生きる子どもたちの幸せを心から願っていました。

衣食住の「天国と地獄」を経験した



Tateishi Shinko 立石伸子

CHAPTER 3 戦友の絆

太平洋戦争中「死んでも帰れぬ」といわれた激戦地ニューギニア島から生還した深田武次郎さん。「戦友を忘れまい」と戦地での記憶を手記に残していました。その子孫である深田政武さん、麻紀さん親子が「ずっと戦友を忘れてはいけない」という武次郎さんの思いをつないでいます。「もう二度と戦争による犠牲を出さないように。誰も悲惨な思いをしないように」。

まさに生き地獄
語り尽くせない苦しみや悲しみ

昭和17年12月にニューギニアの戦地に出征した深田武次郎さん。海軍の護衛艦は船団を組み、パラオ島などを経由して航行しました。ニューギニアに到着すると、既に戦地はアメリカ空軍の制空権下で大量の銃爆撃に耐えがままの毎日。昼間に行動することは難しく、補給を絶たれ、感染症や飢餓に苦しみました。

「ジャングル内の戦いに食うに食なく、撃つに弾なく、餓死、行き倒れと悲惨な戦いの繰り返しで、まさに生き地獄さながらだった。今日が何月何日で、何時かなど関係のない別世界。ただ生きている、夜が明け、日が暮れるの毎日。ジャングル草、

野草の春菊などを食べて何とか生き延びた」。所属していた部隊は総軍2万5591人、うち生還者はわずか811人。生死のふちを喘ぎながら病院船に乗り、語り尽くせない苦しみや悲しみと共に、武次郎さんは懐かしの日本に生還しました。

帰国当時「栄養失調で体重は35kg。生きたミイラ同然のようでした」。武次郎さんの手記に記された日本に帰国した際の体重は、飢えに苦しんだ戦場を物語っていました。「戦地への出航の際、真っ赤な夕焼け空の下、祖国を名残惜しんで合唱した歌」「手りゅう弾で負傷した兵士」「腹部を負傷し、苦しきのあまり自ら拳銃で頭部を撃った上官」「やせ細って多くの将兵が次から次へと倒れていく姿」。手記に記された、事細かな

戦地での記憶は、現代に生きる私たちにとって想像もできない世界が現実にあったこと、悲惨でつらい日々を戦友と乗り越えてきたことを私たちに伝えるべく、生々しい言葉で記録されています。

戦友を忘れないよう
戦地での記憶を記録に残したい

「武次郎は戦地での出来事を思い出すが、ノートに書き記していた」と話すのは、武次郎さんの息子・政武さんと孫の麻紀さん。あるとき麻紀さんは、武次郎さんから「戦地での記憶を本にしたいけれど、どうしたらいいか」と相談を受けました。

武次郎さんは「戦友を忘れないために」と、弔いの気持ちを込めて日本軍に関する収集品400点以上をコレクションしていました。それらの手入れをしながら、戦友のことなどを思い出した際に、さまざまエピソードを政武さんや麻紀さんに話していたのです。



▲入隊後の武次郎さん

本にしたいという話を麻紀さんが聞いてすぐ、武次郎さんは体調を崩して入院し、ガンであることが分かりました。

「本にしたいという思いは、家族だけじゃなく、いろんな人知ってもらいたいという思いがあったのではないかと。戦友のことを話し、伝えることに意味があったのだと思う。『ずっと忘れてはいけない』と何度も言っていたから」。なんとかしな言い方ではないかと一瞬発した麻紀さんは、武次郎さんの手記をパソコンで入力し「武次郎戦記」としてまとめました。

息を引き取る間際の戦地の記憶
戦争のない平和な世界を願って

一時入院したものの延命治療をしないことを選択し、自宅での療養を続けた武次郎さん。麻紀さんが、枕元に武次郎戦記を置き「できたよおじいちゃん」と言うと、ウンウンとうなずいたといいます。そのときはほぼ寝たきりで昏睡間近でした。

臨終の間際「今夜が山かもしれない」と聞かされ、家族が集まっていた。自分で立ち上がることもできない寝たきりの状態だった武次郎さん。突然ベッドから立ち上がり、手をたいて大声で炭坑節を歌い始め、部屋の隅に向かって敬礼したと

いいです。その様子を鳥肌を立てながら見ていた政武さんは「きつと戦友たちが迎えに来たんだ」と感じたとい、その数日後、武次郎さんは息を引き取りました。

「青春まっただ中の年頃に知らない国のジャングルに連れて行かれ、人の生死を目の当たりにしながら命からがら帰ってきたという経験は、忘れたくても忘れられないものだと思う」。亡くなる間際にも鮮明に思い出すほど強烈な70年前の記憶。それは、武次郎さんから話を聞いていた「過酷な戦地で月を見ながら戦友と一緒に歌った記憶」だったのではないかと麻紀さんは言います。

武次郎さんが収集したコレクションと武次郎戦記、深田政武さんと文次郎さんの手紙のやり取りなどをまとめた麻紀さん。3年前に新聞社に投稿したところ記事として取り上げられ、県内の高校などでの展示につながりました。「太平洋戦争終戦の8月だけでなく開戦の12月も戦争を考えるきっかけにしてほしい」と今年12月にも津屋崎で展示会を開催します。

「12月8日の開戦日に戦争を考え、もう二度と戦争による犠牲のない、誰も悲惨な思いをしない世の中になれば」。深田さん親子は、心から、戦争のない平和な世界を願っていました。



▶平和への願いを語る政武さん(右)と麻紀さん(左)

戦時下のつやぎき展を 開催します

深田家が大切に保管してきた戦争の遺品を展示します。政次さんと文次さんがやり取りしていた手紙や、武次郎さんがコレクションしていた日本軍に関連する収集物など、特集の中では取まりきれなかった資料の数々を展示します。

日時 12月2日(金)～12月16日(金)
午前10時～午後4時(日曜日は午後5時まで)
場所 津屋崎千軒民俗館 藍の家



▲昨年開催した藍の家での展示会